

F-2 現代韓国語の「-n kes-ita」文の「主題－解説」構造と意味解釈プロセス

李 英蘭 (東京大学)

realxiaobao@hotmail.com

1. はじめに

本発表では、現代韓国語の文末に現れる「-n kes-ita (以下、kes-ita と表記)」文を「主題－解説」構造の観点から考察することにより、先行研究において明確ではなかった kes-ita の基本的な働きを明らかにし、kes-ita 文の全体像を示すことを目的とする。

kes-ita 文は、形式名詞である「kes」に指定詞の「ita」が後続したもので、本来は名詞文をなしている。が、kes-ita 文には、(1) のように統語的に名詞文であるものもあれば、(2) や (3) のように名詞文であると言い難いものもある。

- (1) i chayk-un thalo-ka ilkun kes-ita.
(この本は太郎が読んだものだ。)
- (2) mun-ul yenun soli-ka tullyessta. thalo-ka tolaon kes-ita.
(ドアを開ける音がした。太郎が帰ってきたのだ。)
- (3) ecey yenghwakwan-ey kassnuntey thalo-ka issnun keya.
(昨日、映画館へ行ったんだけど、太郎がいるのよ。)

前者は kes が名詞として働き、文を「名詞文にする」という機能をしているのに対し、後者は kes と ita が再構造化を通じ一語化し (신선경 1993、梁太永 2005 等)、前後の文を結びつけ、それについて説明をするという「説明のモダリティ表現」であるとみなされていた (李南姫 2001、崔眞姫 2005、印省熙 2006 等)。しかし、「名詞文をなす」という機能と「説明のモダリティ表現」という機能は、全く別の形式であるかのように、両者の間の関連を上手に説明できないという問題がある。また、(3) のようにいずれの場合にも当てはまらない kes-ita 文も存在しているなど、先行研究において kes-ita 本来の意味・機能についての考察は不十分であると言える。

そこで、本発表では、kes-ita 文は、いずれも意味的に主題について何かを述べるものと解釈できる点に着目し、先行研究では把握できなかった kes-ita の基本的な機能と kes-ita 文の全体像を網羅的に説明するためには、「主題－解説」構造という概念が有効であると考え、kes-ita 文を「主題－解説」構造の観点から考察する。

2. 「主題－解説」構造

主題とは何かについては様々な見解があるが、丹羽 (2000:100) では、「X について何か (P) を述べる文形式の「X は P」という文において、「X は」の部分为主题と呼び、「は」の働きを主題提示と言う。それに対して P の部分は提示された主題に対する解説を表す」と述べられている。そのため、「NP1 は NP2 だ」という統語構造を持って現れる (1) のような最も典型的な kes-ita 文は、kes-ita で表される部分である「NP2 (P)」が「NP1 (X=主題)」について何かを述べているという点で、「主題－解説」構造を持っていると言える。但し、kes-ita 文が述べる対象、即ち、主題は、文の表現形式に明示的に現れない場合もある。

- (4) a. [本を指差しながら] thalo-ka ilkun kes-ita. (太郎が読んだものだ。)
b. [突然] ?thalo-ka ilkun kes-ita.

(4a) のように kes-ita 文の場合、kes-ita 文が述べる対象である「この本」(=主題) は、文の表現形式に明示的に現れていないが、「本を指差す」という状況から、当該の kes-ita 文がそれについて述べていることが分かる。それに対し、目の前にある本を指で差すという状況がなく、突然発話される(4b)のような kes-ita 文の場合は、kes-ita 文の意味を正確に解釈できなくなる。この点は、kes-ita 文の意味解釈には二つの情報が必要であり、一つの情報が文の表現形式に明示的に現れていない場合は、先行文脈や発話状況からそれを探し出し、kes-ita 文の意味を解釈するということを示唆している。そして、この場合も kes-ita 文は、主題について何かを述べているため、当該の文は「主題－解説」構造を持っていると言える。そのため、本発表では、kes-ita 文における「主題－解説」構造を、次の (5) のように定義する。

(5) 本発表における「主題－解説」構造の定義

文の意味解釈に必要な二つの情報 (X と Y) において、「Y が X について何かを述べる」という解釈が可能であれば、X は「主題」であり、Y は「解説」である。そのとき、X と Y は、「主題－解説」構造をなしている。

3 節では、(5) の「主題－解説」構造の定義に基づき、kes-ita 文の「主題－解説」構造と意味解釈のプロセスを考察する。

3. kes-ita 文の「主題－解説」構造

kes-ita 文は、その統語構造の違いによって、①名詞文、②疑似名詞文、③非名詞文という三つに分けることができる。名詞文としての kes-ita 文は、上記の (1) のように kes-ita の kes が名詞として働き、「NP1 は NP2 だ」という統語構造を持っているものである。それに対し、疑似名詞文や非名詞文としての kes-ita 文は、上記の (2) や (3) のように kes が名詞として働いていないため、名詞文であると言い難いものである。但し、kes-ita 文に対し、kes を韓国語の別の名詞化辞である「-(u)m」に置き換えたり、kes-ita から「ita」を省略したりするなど、kes の名詞性のテストを行った結果、(2) のような kes-ita 文には、(1) のような名詞文としての kes-ita 文に類似した特徴が多く見られた。そのため、(2) のような kes-ita 文は、名詞文に類似した特徴が全く見られなかった (3) のような非名詞文としての kes-ita 文と区別し、疑似名詞文としての kes-ita 文と呼ぶことにする。

以下では、この三つの kes-ita 文が「主題－解説」構造の中で、どのように意味解釈されるか、その諸特徴を詳細に考察する。

3.1 名詞文としての kes-ita 文

名詞文としての kes-ita 文は、kes が名詞として働く統語的に名詞文であるが、kes の性質によって、①kes が具体的なものを指し示す場合、②kes が抽象的なものを指し示す場合、③kes が何も指し示さず単に名詞化辞として働く場合、という三つに分けることができる。

先行文脈や状況から探し出した主題が、本来、文の構成要素であったということが、疑似名詞文としての kes-ita 文と異なる。

3.3 非名詞文としての kes-ita 文

非名詞文としての kes-ita 文は、統語的に名詞文でもなく、名詞文に類似した特徴も全く見られないものである。

- (13) ecey yenghwakwan-ey kassnuntey thalo-ka issnun keya.
(昨日、映画館へ行ったんだけど、太郎がいるのよ。)

(13) のような kes-ita 文は、先行文脈や状況から主題に該当するものを探すことができない。そのため、後ろを検索しようとし、後続発話を待つようになる。そして、このような意味解釈過程が慣習化され、「後続発話への関連を示唆する」ものとして意味解釈される。

このような意味は、一見、名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文の「主題について何かを述べる」という意味とは異質なものに見えるが、両者の意味解釈は、いずれも「kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要である」ということが関わっている。そして、名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文の場合、kes-ita 文の意味解釈に必要なもう一つの情報は、先行文脈や状況にあるため、それは、kes-ita 文が述べている対象、即ち、「主題」と認識され、当該の文は、その主題について何かを述べていると解釈される。それに対し、非名詞文としての kes-ita 文の場合、kes-ita 文の意味解釈に必要なもう一つの情報を先行文脈や状況から探し出すことができないため、後ろを検索することになり、「後続発話への関連を示唆する」ものとして意味解釈されるのである。これが、意味解釈の過程が kes-ita 文の意味解釈のプロセスであり、kes-ita の基本的な機能であると考えられる。

(14) kes-ita の基本的機能

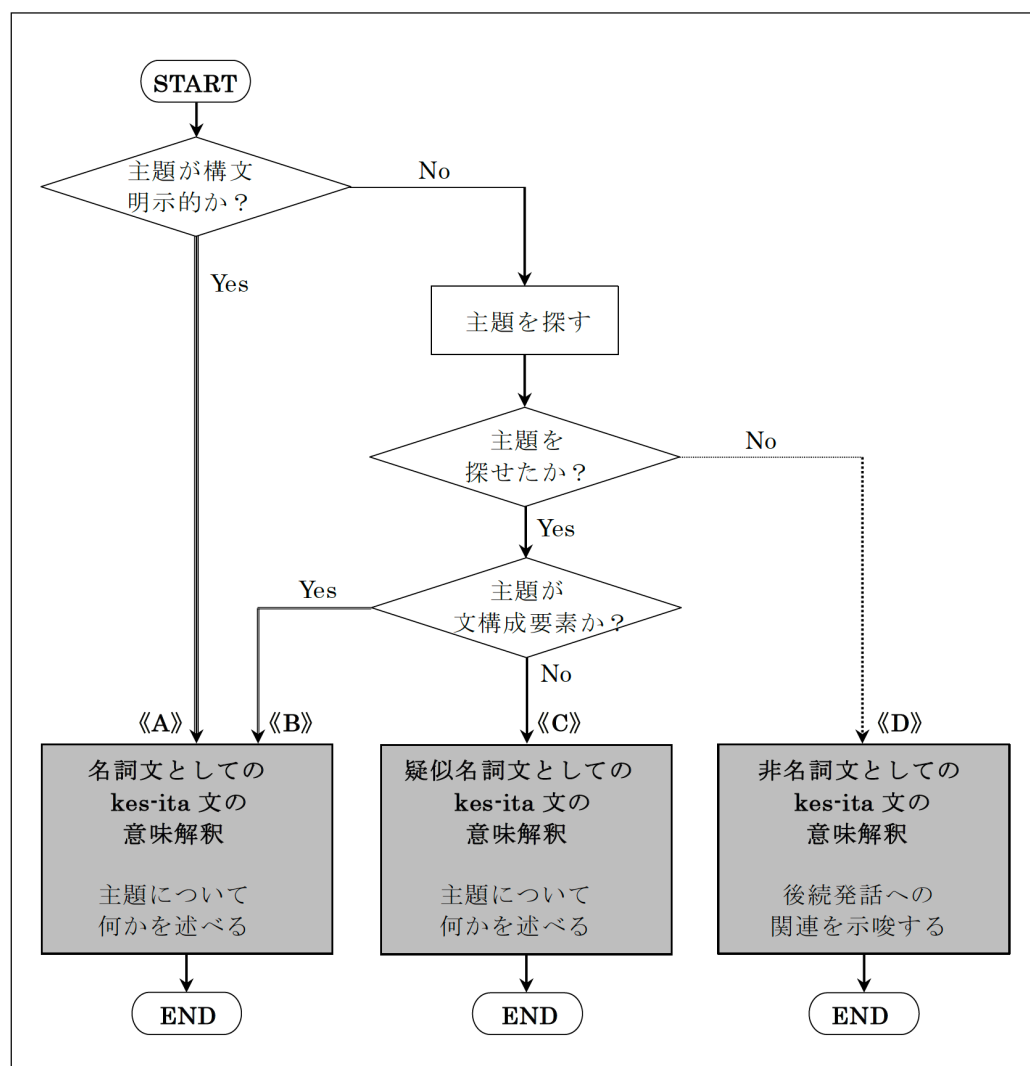
kes-ita の基本的な機能は、当該の文が「kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要であると示すこと」である。それが、前の文脈や状況に存在する場合は、主題となり、当該の kes-ita 文は、「主題－解説」構造の中で、主題について何かを述べるものとして意味解釈される。一方、前の文脈や状況から探し出すことができない場合は、後ろを検索することになり、後続発話への関連を示唆するものとして意味解釈される。

4. kes-ita 文の意味解釈プロセス

本発表で「主題－解説」構造の観点から考察した三つの kes-ita 文について、その意味解釈のプロセスの全体像を提示すると【図 1】の通りである。

kes-ita 文の意味を解釈する際は、まず、主題が構文明示的である否かを判断する。これは、主題が同一文内に「は」や無助詞などによって表され、文構成要素として明示的に現れているか否かを判断するというので、主題が構文明示的である場合、主題を探す必要がなく、当該の kes-ita 文は、その主題について何かを述べていると解釈される。これは、【図 1】において《A》の意味解釈であり、主題が同一文内に明示的に現れる名詞文としての kes-ita 文が該当する。

【図1】 kes-ita 文の意味解釈プロセス



次に、主題が構文非明示的である場合、即ち、主題が同一文内に現れていない場合は、当該の kes-ita 文が述べている対象、即ち、主題を文脈や状況から探すようになる。そして、主題を探し出すことができた場合、当該の kes-ita 文は、文脈や状況から探し出した主題について何かを述べていると解釈される。但し、その前に、文脈や状況から探し出した主題が文構成要素であるか否かを判断する必要がある。なぜなら、主題が文構成要素であるか否かという主題の性質は、当該の kes-ita 文が名詞文として解釈されるか、あるいは、疑似名詞文として解釈されるかを判断する重要なファクターであるためである。文脈や状況から探し出した主題を同一文内に共起させることができる場合、当該の主題は文構成要素であるため、当該の kes-ita 文は名詞文として解釈される（《B》の意味解釈）。それに対し、文脈や状況から探し出した主題を同一文内に共起させることができない場合、当該の主題は文構成要素ではないため、当該の kes-ita 文は疑似名詞文として解釈される（《C》の意味解釈）。最後に、主題が同一文内に現れず、主題を探す段階で、前の文脈や状況から主題を探し出すことができなかった場合は、後ろを検索するようになり、当該の kes-ita 文は、後続発話への関連を示唆するものとして解釈される。これは、【図1】において《D》の意味解釈であり、非名詞文としての kes-ita 文が該当する。

本来、「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」という三つの kes-ita 文は、kes が統語的に名詞として働いているか否かによる分類であったが、kes-ita 文の意味解釈のプロセスを示した【図1】を見ると、統

語構造の違いだけではなく、「主題－解説」観点から見た際の主題の所在にも三つの kes-ita 文において違いが見られることが分かる。

5. おわりに

従来の研究では、kes-ita の機能を、「名詞文をなす」と「説明のモダリティ表現」と区別していたため、両者の間の関連が見られず、全ての kes-ita 文に対し、統一的な説明が不可能であった。それに対し、本発表では、kes-ita 文の意味解釈に「主題－解説」構造という概念を導入することにより、kes-ita の基本的な機能を「kes-ita 文の意味解釈には、kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報が必要であることを示す」ことであると提案したため、「名詞文」「疑似名詞文」「非名詞文」といった統語構造の異なる全ての kes-ita 文に対し、統一的な説明が可能となった。これにより、kes-ita 文の全体像を網羅的に捉えることができると考える。

<引用文献>

- 李英蘭 (2018) 『「主題－解説」構造から見た韓国語の -n kes-ita と日本語ノダ』, ひつじ書房 (印刷中) .
- 李南姫 (2001) 「現代日本語の「のだ」文の総合的な研究」, 大東文化大学大学院 博士論文.
- 印省熙 (2006) 「日本語の「のだ」と韓国語の「-ㄴ 것이다」: 会話文の平叙文の場合」『朝鮮語研究 3』, くろしお出版, pp. 51-94.
- 尾上圭介 (2004) 「第 1 章 主題と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座: 文法 II』尾上圭介 (編), 朝倉書店, pp. 1-57.
- 金廷珉・堀江薫 (2010) 「「のだ」構文の談話機能に関する対照言語学的考察－韓国語の「KES-ITA」との対比を通じて－」『言語学と日本語教育 VI』, くろしお出版, pp. 175-190.
- 久野暉 (1973) 「第 2 章 「ハ」と「ガ」(その一)－主題・対象・総記・叙述－」『日本文法研究』, 大修館書店, pp. 27-35.
- 近藤安月子・姫野伴子 (2012) 『日本語文法の論点 43: 「日本語らしさ」のナゾが氷解する』, 研究社
- 田中望 (1979) 「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8, 慶応義塾大学国際センター, pp. 49-64.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』, ひつじ書房.
- 崔眞姫 (2005) 「「のだ」の文法化と機能別必須性に関する研究」, 新戸学院大学大学院 博士論文.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスの意味 II』, くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編) (2009) 「第 10 部 主題」『現代日本語文法 5』, くろしお出版, pp. 175-259.
- 丹羽哲也 (2000) 「主題の構造と諸形式」『日本語学』19 巻 5 号, pp. 100-109.
- 野田尚史 (1984) 「有題文と無題文－新聞記事の冒頭文を例として」『国語学』136 集, pp. 65-75.
- 김기혁 (2000) 「지정의 문법 범주」『이중언어학』제 17 호, pp. 77-95.
- 김상기 (1994) 「관형형어미+kes-ita 구문 연구」, 동아대학교 대학원 석사학위논문.
- 남기심 (1991) 「불완전명사 ‘것’의 쓰임」『국어의 이해와 인식』, 한국문화사, pp. 77-88.
- 신선경 (1993) 「‘것이다’구문에 관하여」『국어학』Vol. 23 No. 1, 국어학회, pp. 119-158.
- 梁太永 (2005) 「‘것이다’構文 研究」, 한국외국어대학교 대학원 석사학위논문.
- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In: Cole, P. & Morgan, J. (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, Academic Press. 41-58.